

■図書紹介■

谷川彰英 著

『問題解決学習の理論と方法』

(明治図書, 1993年)

宮崎正勝*

教育には歴史に根差した枠組みが有り、それが隠れたカリキュラムとして学校教育システムを背後から支えている。戦後、教育「民主化」の理論、方法として問題解決学習、ガイダンス理論などの摂取が目指されたが、条件の整わない中で教育方法の革新は挫折し、伝統的教育観、教育方法が息を吹き返した。規範が個人の外の社会に在ると考え、教育を価値や認識体系の注入と考える傾向が強い教育風土の中で、個人の「自己指導力」や「主体性」を根幹に据える教育理論や教育方法は馴染みにくかったのである。しかし、戦後半世紀が経過し、日本の社会経済状況、世界システムが急速に変化する中で、「国際化」と「成熟した市民社会」に即応した教育方法の模索がなされつつある。そうした中で、時代の動向に即応した教育理論、方法として問題解決学習が再度注目されている。

本書は、問題解決学習の定着に情熱を燃やしてきた著者が、地名学習の実践、“連続セミナー授業を創る”の創設と指導、生活科の内容形成への参与などの諸面における積極的な実践を踏まえ、理論・歴史・実践の3側面から、「新しい学力観」が求められている現在の状況の中で問題解決学習を問い直した著作である。1979年に明治図書から出版された『社会科理論の批判と創造』に収められた4編の問題解決学習に関する理論的考察の論文と、その後十数年にわたり著者が精力的に展開してきた多面的実践と共に書かれてきた9編の理論的、実践的論文が集められている。

内容は、「第1章 問題解決学習の理論」「第2章 問題解決学習の理論と社会科教育」「第3章 問題解決による授業づくりの新しい視点」からなり、それぞれ5編、3編、5編の論文から構成されている。

第1章は、初期社会科の時期の問題解決学習論を扱った「問題解決学習論」から「『新しい学力観』と問題解決学習」に至るまでの著者の問題解決学習に関する諸論稿が集められている。著者自身が「問題解決学習の思想とは、常に新しい問題に挑戦して、解決を図っていくところにある。その精神が失われた時、それは一種のイデオロギーに墮してしまう」と述べておられるように、社会が変化する中で問題解決学習の理論を反芻し読み直されてきた著者の研究、関心の軌跡が示されている。

第2章は、梅根悟、柳田国男の戦後の社会科構想、酒井忠雄の歴史教育論について論じている。教育には、「強烈な問題意識」を背景とする「前向き」の情熱と「問題意識」に基づく行動が必要であるとする著者の視点が明確に現れている諸論稿である。

第3章は、理論を実際の授業活動に結び付けるための実践の中で書かれた諸論稿が集められている。著者は最後に自らの授業実践の記録ともいべき「ウォーリーの授業への挑戦—研究者自身の問題解決を—」を収め、研究と実践の統一の必要性を強調している。

全体を読む中で、情熱、実践、理論・方法の3者の結合を重視する著者の生き方と研究の軌跡が浮かび上がってくる書である。

* 筑波大学附属高等学校